加藤老师来开讲!

点击收听

风铃

过去，在没有空调也没有电风扇的时代，为了让又闷又热的夏天不那么难受，日本人想出了各式各样的办法来分散自己的注意力。

一种办法就是用纸做的团扇扇风乘凉。为了求得一些精神上的凉爽，日本人会在扇子上描画各种清凉的图案，比如在水中游动的金鱼，在早晨开放的牵牛花，以及用蓝色的墨写出的凉爽的“凉”字。

另一种办法就是吃凉物解暑。吃的凉物可以是用井水冰镇过的西瓜，也可以是在劈开的竹筒中、如小河流水般自上而下顺水漂流的“流水素面”。

另外，还有一种办法是聆听那些让人觉得非常凉爽的声音。在夏日正午，如果听到知了不停地鸣叫，日本人就会觉得特别闷热。但到了傍晚，如果听到日本暮蝉在山林里鸣叫，日本人就会觉得很凉爽。

其实，风铃就是这样一种可以给人送来凉意的小装置。

据说，日本的风铃起源于中国古代的“占风铎”。唐代有一种装置，将一块碎玉石或者一个铃铛悬挂起来，随风摇响。

记录唐玄宗、也就是李隆基在位政绩的《开元天宝遗事》中曾出现过这样一段记载：“歧王宫中竹林中，悬碎玉片子，每夜闻碎玉子相触声，即知有风，号为至占风铎。”说的就是，在唐代岐王的王宫里有一片竹林，林中悬挂着碎玉片，每天晚上，如果听见玉片咔零咔零地相互碰撞，就可以知道竹林里有风吹过。就因为这样，这种装置被命名为“占风铎”，也就是占卜风向的大铃铛。

中国诗人白居易在长篇叙事诗《长恨歌》中，用这样两句话描写了唐玄宗在杨贵妃死后伤心欲绝的心境：“行宫月见伤心色，夜雨闻铃肠断声。”

意思是，入夜后下起了雨，宫殿屋檐下悬挂的铃铛在风中鸣响，咔零零，咔零零，仿佛在呼唤：“三郎，郎当！”唐玄宗的别名叫李三郎，这声音听起来就像在说：“三郎啊，你没落了！”

另外，佛教寺庙里的建筑也会在屋檐的四角悬挂铜做的形状类似钟的铃铛。每每有大风吹来，会发出喀琅喀琅的声音，就像在敲一只镀锡的小铁桶。这种铃铛被称为“风铎”。

中国古代的“占风铎”和“风铎”都传到了日本。那时，青铜器在日本价格高昂，所以只有贵族会在自家房子的屋檐下挂小型的风铎，用来辟邪消灾。过去的人相信风铎的声音和鞭炮以及锣鼓一样，都有驱除恶灵的效果。

随着时代的推移，风铎的体型越变越小，样式也越来越简单，并逐渐普及到寻常百姓家。这就是我们现在看到的风铃。即使只有轻柔的微风吹过，小小的风铃也会发出清脆可爱的叮当声。每每听到这样的声音，日本人就会觉得：“啊，凉爽的清风吹来了！”于是，暂时忘却夏天的炎热。也因为这样，日本人一般只在夏天才会在屋檐下挂起风铃。

到了大约 18 世纪初、江户时代中期，日本人也开始制作玻璃风铃。人们会给透明的玻璃风铃画上鲜红的金鱼或者五颜六色的牵牛花。当风吹来时，玻璃风铃就会发出类似用筷子敲打玻璃杯的声音。

现在，日本既能看到玻璃风铃，也能看到铁和铜等金属做的风铃。而且，形状大小多种多样，丰富多彩。 有的风铃声音清脆高亢，有的低沉厚实，音色各不相同。

在日本古代，除了风铃以外，还有一种非常优雅的声学装置，叫做“水琴窟”。

这种装置通常建造在日本茶室的旁边，或者日式的庭园、神社、寺庙、公园里等等。建造时，需要先在地下开一个洞，把一个瓮倒扣在里面，然后让水滴连续不断地滴落在瓮中，通过特殊的方法让水滴声在地下产生回响，这样地面上的人就可以聆听到似有若无的回声。水琴窟安静优雅，是一种带有贵族趣味的声学装置，但它并不适合建造在城市里的普通老百姓的住宅。所以到 20 世纪初，水琴窟就渐渐消失了。不过，在 20 世纪 80 年代、昭和时代末期，一些日本人又重新认识到了它的价值，现在您仍然可以在日本的庭园或者神社、寺庙、公园、茶室等地看到水琴窟。

如今，互联网上有许多视频网站，随时随地都可以欣赏到风铃和水琴窟的声音。不过，相比之下，还是真实的声音更加生动，回味悠长。

大家如果有机会在夏天来到日本，请记得一定要欣赏一下属于日本的夏天的声音。

《加藤老师来开讲!》是 NHK 日本国际传媒中文广播节目《波短情长》中的小栏目，特邀日本明治大学教授加藤彻深入浅出、诙谐幽默地讲解日本文化。您有没有想要了解的日本文化或习俗？欢迎给本节目来信或留言！

加藤先生の開講コーナー!

中国語音声はこちら

風鈴

昔は冷房も扇風機もありませんでした。昔の日本人は、蒸し暑い日本の夏を過ごすため、気分をまぎらわせる方法を、いろいろ工夫しました。

例えば、紙の団扇であおぐ。団扇には、気休めに、水の中を涼しげに泳ぐ金魚の絵とか、さわやかな朝に咲く朝顔の絵を描いたり、青い墨で「涼」という漢字を書いたりしました。

冷たい物を口にする。井戸水で冷やした西瓜を食べる。竹を割った樋に水を小川のように流して、「流しそうめん」を楽しむ。

涼しさを感じる音に耳を傾ける。例えば、ニイニイゼミが夏の真っ昼間に「ミーン、ミンミン･･･」と鳴くのを聞くと、暑さを感じます。が、ヒグラシが夕暮れ時、山林のなかで「カナカナカナ･･･」と鳴くのを聞くと、日本人は涼しさを感じます。

風鈴も、涼しさを感じるための工夫でした。

日本の風鈴の起源は、古代中国の「占風鐸」だと言われています。唐の時代には、宝玉の破片や、鈴を吊り下げて、風によって鳴らす、という仕掛けがありました。

唐の玄宗皇帝こと李隆基の時代の記録『開元天宝遺事』には「歧王宮中竹林中、懸碎玉片子、毎夜聞碎玉子相触声、即知有風、号為至占風鐸」とあります。大意は――唐の岐王の王宮では、竹林のなかに、宝玉の破片をつりさげてあった。毎夜、宝玉の破片どうしがシャラシャラとこすれる音が聞こえると、竹林の中で風が吹いていることがわかる。そこで、この仕掛けの名前を「占風鐸」、つまり風を占う大きな鈴、と名付けた、という意味です。

白居易の長編漢詩「長恨歌」には、楊貴妃が亡くなったあとの玄宗皇帝の傷心のさまを、

「行宮見月傷心色、夜雨聞鈴腸断声」

と詠んでいます。夜、雨が降る。宮殿の軒下につるした鈴が、風に吹かれてシャララン･･･と鳴る。シャララン･･･まるで「三郎、郎当！」と言っているように聞こえる。玄宗皇帝の別名は李三郎。「三郎さん、おちぶれましたね」と聞こえたのです。

また、仏教寺院では、建物の四隅の軒下に、青銅製の鐘形の鈴を吊しました。強い風が吹くと、カランカラン、と小さなブリキのバケツを叩くような音が鳴ります。これを「風鐸」と言います。

古代中国の「占風鐸」や「風鐸」は、日本にも伝わりました。昔の日本では青銅器は高価でしたので、貴族だけが、厄除けのため邸宅の軒下に小型の風鐸を吊しました。爆竹とか銅鑼の音と同様、風鐸の音も魔除けの効果があると、昔の人は信じたのです。

時代がくだると、風鐸は小型化して簡素な作りになり、庶民のあいだにも広まりました。これが風鈴です。小さな風鈴は、そよ風が吹いただけでも、チリンチリン、とかわいらしい音が鳴ります。「ああ、涼しいそよ風が吹いているんだな」と耳でも風の気配を感じることで、日本人は夏の暑さを一瞬、忘れることができました。というわけで、日本では、風鈴は夏だけ軒下にさげるようになりました。

江戸時代中期、18 世紀の初めごろから、日本人もガラス製の風鈴を作るようになりました。ガラスの風鈴は、透明なガラスに、真っ赤な金魚の絵や、色鮮やかな朝顔が描かれています。風が吹くと、ガラスのコップを箸で叩くようなチャラチャラ、という音が鳴ります。

現在の日本では、ガラス製の風鈴と、鉄や青銅など金属製の風鈴の両方があります。風鈴の形や大きさもバラエティに富んでいます。高くて澄んだ音や、低くて厚みのある音など、いろいろな音色を楽しめます。

昔の日本では、風鈴の他に、水琴窟という優雅な音響装置もありました。水琴窟は、日本の茶室の脇や、日本庭園、神社や寺、公園などに造られる仕掛けです。地面に空洞をつくり、そこへ甕を逆さに設置します。そして水滴を継続的にポトン、ポトン、と甕に落下させ、その音を特殊な方法で地中で反響させ、地上に漏れてくるかすかな余韻を楽しむ、という仕掛けです。

水琴窟は、静かで優雅で貴族的です。しかし、市街地の庶民の住宅には向いていません。というわけで、水琴窟は 20 世紀の初めには衰退しました。が 1980 年代、昭和時代の末からその良さが見直されるようになり、今も日本庭園や神社、寺、公園、茶室などで水琴窟を見ることができます。

現代では、インターネットの動画投稿サイトでも、風鈴の音や、水琴窟の音を楽しむことができます。しかし、やはり、生の音の豊かな響きには、かないません。

もし今後、夏の日本にいらっしゃる機会があれば、ぜひ、チリンチリン、という日本の夏の音色も、お楽しみください。

「加藤先生の開講コーナー！」は NHK 国際放送のラジオ番組『波短情長』のコーナーです。明治大学の加藤徹教授が、日本の文化について楽しく解説します。あなたの知りたい日本の文化や風習は何ですか？メッセージもお待ちしています。